

陳舜臣さんを語る会通信

NO.90

Nov. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年11月20日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

『中国の歴史』のダイジェスト版ではない『中国五千年』 / 神戸の真珠産業(続)

本号では、『中国五千年』(1983 平凡社)を取り上げました。『中国の歴史』及び『中国の歴史 近・現代篇』は、本通信No. 23をご覧ください。また、本号4頁には、神戸の真珠産業(続)を載せました。(編集委員 橘雄三)

『陳舜臣中国ライブラリー22
中国五千年』「自作の周辺」
陳舜臣VS稲畑耕一郎対談
より抜粋転載
傍線は編集委員の加筆

稲畑 今回は『中国五千年』です。陳 五千年ね……。最初にタイトルを決めるとき、出版社(平凡社)がそういうので、ちよつとオーバーじゃないかと思っただけです。で、編集者に、せめて三千年ぐらいにしましょう、と言ったんですよ。そしたら、だめだ、って。有史以前のことも書いてあるんだし、それは何年前かわからないじゃないか、それに三より五のほうが語呂がいいでしょう、と言われましてね。それで、中国のむかしむかしからの話ということで私も納得して「五千年」ということになったんです。でも、書いてみると後のほうの千年、二千年、それも百年、二百年の事柄が多いんです。私たちにあって、歴史というものは近々の千年、さらには最後の百年のほうが興味深いですからね。つまり、そのときを生きている人にとって、自分たちの時代により近い事蹟を知ることのほうが大事だ、ということではないでしょうか。

稲畑 この『中国五千年』を書かれる前、すでに全十五巻の通史『中国の歴史』(平凡社刊)を書かれていますね。

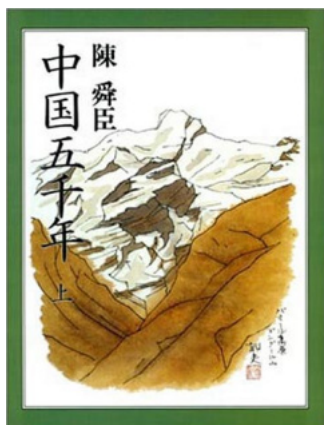
陳 実質的には十四巻、最後のは年表や索引の類ですから。

稲畑 『中国五千年』はその要約といふか、ダイジェスト版ということなんです。

陳 最初はそんなふうにも考えただんですがね。いろいろ構想を練っているうちに、これはやっぱり新しいものとして、独立した『中国五千年』というものを書こうと思っただけです。

■上段傍線の箇所

陳舜臣さんはこのようにおっしゃっています。編集者との「五千年」「むかしむかしからの話」などとのやり取りがあったせいか、紀元前の話が多く、上巻(平凡社版)の終わりでまだやつと南北朝時代です。



平凡社版表紙 平山郁夫画

『中国五千年 上』各節内容(一)

註:頁は平凡社版による

頁	題	主な内容 ■はキーワードです 順不同	時代
3	古代遺跡と神話	『史記』は、中国の歴史を、三皇を無視し、五帝本紀から始め、あと、夏殷周という世襲王朝が交替したとしている。夏王朝は実在したか?夏王朝の墟とされる遺跡が発掘されたが、まだ、証拠不十分。陳舜臣さんは「夏王朝は存在したとおもいます」とおっしゃっている。■黄河文明(仰韶、竜山)、長江文明(河姆渡、良渚) 黄河の治水工事を指揮する夏の始祖禹(う) →	三皇五帝 夏
29	文字と青銅器	殷墟の発掘、甲骨文字の発見により殷王朝の存在が証明。殷代文化のシンボルは青銅器ですが、青銅器の不思議は、いきなり最高級の作品として出現していることです。■劉鉄雲、羅振玉、王国維	殷
45	殷周革命	革命とは天命を受けた有徳者が暴君に代って天子となることですが、周の武王の時代、牧野の戦いで殷を破る。■太公望	殷から 周へ

『中国五千年 上』各節内容(二)

註：頁は平凡社版による

頁	題	主な内容 ■はキーワードです 順不同	時代
63	封建の世	天子が変わったというだけでなく社会が変わる。特色は、殷は占トによる神権政治、周は封建制	周
79	春秋から戦国へ	周は、都が鎬京にあった西周と洛邑に移った東周に分けられる。東周では、周宗家の支配は有名無実となる。いわゆる、春秋戦国時代。 ■諸子百家 前551年、孔子、魯に生まれる	
103	統一への道	戦国の七雄から一人、秦が抜け出す。秦は全体主義的法律国家の道を進むが、商鞅がそのレールを敷く。■縦横家：蘇秦、張儀	秦 (221-前206)
121	大崩壊	前247年、太子政即位。呂不韋自殺、韓非自殺、荊軻失敗。前221年、秦全土統一。自ら皇帝と称す。郡県制、同文同軌。焚書坑儒。前210年、始皇帝没す。陳勝・呉広、劉邦、項羽ら挙兵。■李斯	
145	漢の風起こる	劉邦・項羽「鴻門の会」→楚漢戦争→前202年、垓下の戦い、項羽敗死、劉邦皇帝に。劉邦、前195年、故郷の沛に帰り、「大風起こりて…」と歌う。 ■郡国制、呉楚七国の乱	前漢 (前202-後8)
167	栄光の時代	武帝即位の時代、国庫は豊か。対匈奴積極策(衛青、霍去病)。五経博士をおき儒教の国教化を図る。■張騫	
185	下り坂	⑦武帝の晩年。李陵事件、それに関連し、司馬遷宮刑に処さる。武帝後の前漢は下り坂。そんな中であって、⑨宣帝だけは名君とされている	新 (8-23)
207	漢の滅亡と再興	⑨宣帝の死後、儒教かぶれの⑩元帝、女色におぼれた⑪成帝、同性愛者の⑫哀帝、9歳で即位した⑬平帝と続き、王朝は王莽に篡奪される。が、王莽の「新(8-23)」は永続せず、劉秀、洛陽を都に漢を再興(後漢の光武帝)。 ■赤眉の乱	
229	緊縮の時代	「小さい政府」「後漢はあまり冴えない時代であった」といわれる。後漢後期の宮廷政治を動かしたのは外戚と宦官。 ■金印「漢委奴国王」 仏教伝来 紙の発明	後漢 (25-220)
253	破滅への道	宦官党⇄党人派(清廉な官僚)。“党錮の禁”(166、169年)。黄巾の乱(184年)から「三国志」の英雄たち(曹操、劉備、孫堅・孫権ら)は登場	
271	鼎立と統一	曹操・曹丕の魏、劉備の蜀、孫権の呉の鼎立から、280年、司馬炎の晋(西晋)による統一へ(～316年)。■邪馬台国	三国時代 西晋
291	再び分裂	内部の八王の乱、及び北方の民族大移動→晋(西晋)の南遷(東晋)。 ■太平道 五斗米道 仏教	南北朝時代 (439-589)
313	南風競わず	晋の南遷から隋による統一までの南北朝双方を描く。陳舜臣さんは、短い間だったが華北を統一した前秦の苻堅を、世界主義者として高く評価する	
333	玉樹後庭花	孝文帝の北魏など、北朝の記述が多い。なお、節の題名となった「玉樹後庭花」は、南朝最後の王朝陳の最後の皇帝陳叔宝が宮廷生活をよんだ詩で、亡国の詩として不祥のものとされてきた。 ■倭の五王、南朝の宋に使者を送る	

平凡社版
内表紙挿絵平山郁夫 画
石寨山出土の銅牛

中国雲南省晋寧県石寨山にある墓葬群。一九五五～六〇年に四回の発掘が行われ、滇王墓と考えられる墓をはじめとし数十基の墓葬が発見された。銅鼓、編鐘、青銅製利器、鉄製利器、鏡、漆器、貨幣などの遺物が出土し、戦国末期より後漢にかけての遺跡と考えられている。(ブリタニカ国際大百科事典より)

戦国末期～後漢の石寨山遺跡

『中国五千年 下』各節内容

註: 頁は平凡社版による

頁	題	主な内容 ■はキーワードです 順不同	時代
3	遼東にて死ぬなかれ	遼東とは、高句麗遠征(第一次~三次)の戦場のこと。■煬帝 大運河	隋 (589-618)
25	群雄滅亡	大運河建設の負担、高句麗遠征の失敗、煬帝の遊興散財で人心は離れ造反挙兵が続く。そんな中から李淵親子が長安を陥す	
43	唐の日の出	李淵の次男世民が兄と弟を殺す。高祖、世民(太宗)に譲位。■貞観の治 玄奘	唐 (618-907)
61	太唐の日々	この節の主人公は則天武后、あと少し玄宗と楊貴妃。■唐王朝鮮卑説 遣唐使	
79	大乱と余光	玄宗の治世といえ、開元の治と安史の乱。後者には楊貴妃がからむ。■阿倍仲麻呂 空海	
99	滅亡の系譜	黄巢の乱~五代十国。五代の後晋、契丹に燕雲十六州を割譲。■藩鎮(節度使)	五代十国
119	大宋春秋	五代後周の節度使趙匡胤、宋建国。趙匡胤は中国史上最高の名君(陳舜臣)。尚武→文治の弊害も。■清明上河図 澶淵の盟 慶暦の和約 宋詞 新法派・旧法派 水滸伝 方臘の乱	北宋 (960-1127)
141	海上の盟	「海上の盟」とは、1120年、宋の使節が海を往来、金の阿骨打(-1123)との間に遼挾撃を約した同盟。靖康の変(1126-27)起こる。■猛安・謀克	
153	南北揺れる	靖康の変で、欽宗及び太上皇徽宗は金に連行、宋王朝はいったん滅亡。→南宋(高宗、都:杭州)。モンゴル草原が不穏。■秦檜 岳飛	南宋 (1127-1279)
175	草原の風雲	1206年、テムジン、全モンゴルを統一、チンギス汗を称す。北のモンゴル、東北の金、西北の西夏、そして南宋、この関係は微妙	
193	興亡の譜	1234年、金滅亡。1271年、フビライ、元建国。1279年、南宋滅亡。■文天祥 文永の役	
209	海陸騒然	元は淮南、江南、そして海上(海賊)には支配の手が回らなかった。また、元の皇帝には暗君が多かった。元末には紅巾の乱。■弘安の役 元曲 マルコ・ポーロ 白蓮教	元 (1279-1368)
227	歴史の明暗	朱元璋、紅巾軍の一兵卒から身を起し、長江一帯を平定、1368年、南京で帝位に即き、国号を明と定め、洪武と建元。社会の最下層からはいあがった経歴は、統治に明暗両面を反映	明 (1368-1644)
247	紫禁城哀歓	①洪武帝(朱元璋)の孫②建文帝の時代、朱元璋の第四子燕王朱棣(1399-1402 靖難の変)、帝位を奪う(③永楽帝 都:北京)。以降、永楽帝の系統が続く■鄭和の大航海 土木の変	
267	退廃の季節	『明史』は皇帝16人のうち、太祖(洪武)、成祖(永楽)、仁宗、宣宗、孝宗以外は落第としている。1644年、李自成の東征軍に北京は陥ち、崇禎帝は自殺。明将呉三桂、清に降り、清軍、山海関から北京に入り李自成一派を駆逐。■王陽明 倭寇 勘合貿易 冊封・進貢 東林党	
283	旗の国	英傑①ヌルハチ(1559-1626)、女真族を組織化、「八旗」編成。国号を「大金」と定める。息子②ホンタイジ、国号を「清」に。また、部族名を女真から満州に。1644年、その子③順治帝が北京入城、「清」が中国の主となる。■摂政ドルゴン 国姓爺朱(鄭)成功	清 (1644-1912)
301	三世前後	節の題名「三世」は康熙・雍正・乾隆をいう。清に暗君なしといわれる。特に、康熙、乾隆両帝は出色。また、清に宦官の禍なしとも。■三藩の乱 白蓮教の乱 典礼問題 アヘン戦争 林則徐	
317	相つぐ国難	アヘン戦争のあと、太平天国の乱、第二次アヘン戦争と続く。■日本の台湾出兵 日清戦争 戊戌変法 義和団蜂起 辛亥革命	
333	現代へ	1912年1月1日、孫文、南京で臨時大總統に就任、中華民国成立を宣言から1949年10月1日の中華人民共和国成立までが略述されている	中華民国

平凡社版表紙
平山郁夫画

紙幅を割いてほしかった。
このあたりは、もう少し

ています。
袁世凱をめぐる政局(第二、第三革命)、第一次世界大戦、日本の対華二十一条要求、五・四運動、中国共産党創立、国民革命軍北伐、九・一八事件、長征、西安事件、南京大虐殺、終戦、国共内戦などを経て、一九四九年十月一日の中華人民共和国成立までが15頁ほどに、駆け足で記述されています。

その後の主な内容。
一九一二年一月、中華民国臨時大總統に就任した孫文は、革命の成果を守るため、宣統帝を退位させることを条件に、袁世凱に地位を譲ります。

最後の節「現代へ」補足

No.87に続き、神戸の真珠産業を いま一度、取り上げました

本通信No80で『凍った波紋』を紹介して以来、神戸の真珠産業に興味を持ち、本通信でも取り上げてきました（No87）。この頁は、更にその続きです。

『神戸真珠物語』（二〇〇九年ジュンク堂書店）より抜粋転載
傍線、小見出しは編集委員の加筆



欧米で人気の高かった真珠が伊勢湾で養殖されるようになると、真珠養殖の産地は四国、九州へと広がった。その結果、それらの生産地から比較的往き来のしやすい国際港湾都市神戸が真珠の集荷地となり、そこで、加工も、輸出も始まった。

要するに、全国各地から神戸に真珠業者が集まり、加工された真珠が神戸港から各国貿易業者の手によって世界へ飛び立って行ったというのが「真珠の街・神戸」の成り立ちなのである。（p.8）

神戸の居留地には、開港以来、日本産の生系やサング等を扱う外国人商館が次々と建てられ、アコヤ真珠も商館を通じて盛んに取引が行われるようになる。「御三家」と呼ばれ

たミキモト、高島真珠、北村真珠が神戸に拠点を構え、続いて大月真珠や山勝真珠も本社を移す。

選別などに「六甲山に反射した柔らかな北光線」が最適

真珠業者が集まってきたのには、もうひとつ、神戸の地形・風土が大きく関係している。

自然が生み出す真珠には、当然のことながら、良質なものもあれば、そうでないものもある。大きさや色合いにも微妙な違いがある。その、言葉では表現し尽くせない色合い照りの具合、真珠層の巻き等を選別するのに、神戸の風土は適していた。

直射日光だと、天候によって明暗の差が激しいために選別がしにくい。その点、神戸は六甲山に反射した柔らかな北光線を安定して得られるという利点を持っている。それに加えて、北野町あたりは東西に伸びている地形から、真珠の加工業者が北窓のある作業場を設けやすかった。

今日でも百社を超える真珠業者がこの界限に事務所を持ち、「パールストリート」の名で呼ばれる等、パールシティー神戸の中心になっている。（p.10）

「三宮の夜は真珠屋でもつ」

戦争によって一時はストップした真珠業界だが、戦後再び生系と並ぶ

輸出の花形産業となり、「三宮の夜は真珠屋でもつ」といわれるほど隆盛を極め、長者番付にも真珠業者が名を連ねたほどであった。（p.12）

琵琶湖で淡水真珠の養殖

日本における淡水真珠の先駆者は、御木本幸吉氏の下で研究を続けていた藤田昌世氏で、大正年間に琵琶湖で養殖を始め、一九三五年に事業化されました。（p.16）

■以下、『新修神戸市史』「産業経済編2 第二次産業」（二〇〇〇年）より。

大正末から昭和にかけて、国鉄（現JR）の南側の葺合区南部（現中央区東部）に模造真珠業が集中し、養殖真珠業者は安定した光線の確保もあって国鉄より北側の生田区山本通・中山手通（中央区西部）から葺合区（現中央区）熊内、灘区篠原の山手にかけて散在していた。山手には真珠などの貿易に携わる華僑や外国人が多く住んでいた。さらに、戦後には北野町・山本通周辺に集中するようになり、近年は北野がパールシティー神戸の中核として脚光をあびるようになった。（p.883-884）



上の地図、茶線はシュウエケ邸前の東西の通りで、異人館街のメインストリート。当時、**緑色枠**内に山勝真珠関係の会社が多く社屋を置いていた。現在は、山勝真珠はなく、ワコーレのマンションが幾棟も立っている。なお、**水色の道路**が、文中記述のパールストリート。